



ミックス サンド



川崎ゆきお

立花は最近感覚的になっている。感情的に、と 言ってもいい。感覚と感情の違いなど考えたこともない。そういうことを考えるのが理知的とか言うのだろうか。感覚や感情だけに囚われないで思うこと、考えることだろう。それは分かっているのだが、なかなかそうはいかない。つまり人は「考える葦」だが感情的動物とも言う。それは動物には失礼かもしれないが。

感情はエンジンで、感覚はセンサーだ。感情は動力でもある。感情的になるからこそパワーも出れば、逆に元気もなくなる。感情が薄くなると、刺激もない。あまり世の中が楽しく見えないだろう。逆に悲しくも見えないのでとんとんかもしれないが。

この感情の問題は気分の問題でもある。気分そのものが感情の産物のためだ。ではどうしてそういう気分になるのかだ。

「感情的になってはいけません」と立花の師匠が言う。

「師匠は、その言葉、感情で言ってません？」

「言ってます」

「よかった。安心しました。何か非常に高度な頭脳から発した言葉だと思ったので」

「それを使うまでもないでしょ。こういうのは感覚だけで十分」

「感覚と感情について教えて下さい」

「感覚により、感情が出る」

「はい、分かります」

「終わり」

「まだあるでしょ。解説が」

「あるように思うのは、感覚ですか、感情ですか」

「感じです」

「じゃ、感情ですね」

「いえ、勘です」

「じゃ、感覚ですね」

「うーん、どちらかなあ」立花は迷った。

「迷っておるのかね」

「はい」

「それは感覚かね、感情かね」

「両方です」

「ほう」

「ミックスされたようなものです」

「そうだね立花君。こんなものは分けなくてもいい」

「感情や感覚の奥にあるものは何でしょう」

「踏み込んだね。立花君」

「はい」

「赤ちゃんを見ていると分かるかも」

「赤ちゃんが欲しているものですか」

「それは快不快でもあるし、好奇心でもある」

「師匠、また適当な」

「赤ちゃんが人間の原型であるなら、意外と単純なものかもしれん」

「はあ」

「ただの好き嫌いとかね。そう言うことだけで、人は動く。そんな偉そうなことではなく。そういうのは後付けだね」

「もう聞きません」

「私の話をかね」

「はい」

「それは立花君にとって単に不都合な話になるからでしょ」

「聞いても無駄なので」

「それは、感覚ですか感情ですか、それとも理知的なことですか」

「やはり、ミックスサンドのようです」

「はい、それでよろしい」

了